

Stratacom Preprocessor

ソフトウェアのバージョン : 3.0

HP OpenView Performance Insight

ユーザーガイド

2007 年 4 月



法律上の表示

保証

HP 製品およびサービスに対する保証は、当該製品およびサービスに付属の保証規定に明示的に記載されているものに限られます。本書のいかなる内容も、新たな保証を追加するものではありません。HP は、本書中の技術的あるいは校正上の誤り、省略に対して責任を負わないものとします。

本書に含まれる情報は、予告なく変更されることがあります。

権利の制限

本製品は機密コンピュータソフトウェアです。所有、使用、または複製には、HP から有効な使用許諾を得る必要があります。FAR 12.211 および 12.212 に従って、商業用コンピュータソフトウェア、コンピュータソフトウェアドキュメント、および商業用製品の技術データは、ベンダ標準の商業用ライセンスのもとで、米国政府にライセンスが付与されます。

著作権

© Copyright 2002 - 2007 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

本書のいかなる部分も、Hewlett-Packard Company から事前に書面による許諾を得ることなく、無断で複写、複製、翻訳をしてはならない。マテリアルに記載されている内容は、予告なく変更されることがあります。

商標

OpenView は、Hewlett-Packard Company の米国の登録商標です。

Java™ は、米国 Sun Microsystems, Inc. の商標です。

Oracle® は、米国 Oracle Corporation, Redwood City, California の米国における登録商標です。

UNIX® は、The Open Group の登録商標です。

その他の製品名は、それぞれの商標またはサービスマーク所有者の財産であり、これによって承認されています。

サポート

次の HP OpenView の Web サイトを参照してください。

<http://www.managementsoftware.hp.com/>

これらの Web サイトには、HP OpenView の提供する製品、サービス、サポートについてのお問い合わせ先や詳細が掲載されています。

HP OpenView のオンラインソフトウェアサポートでは、お客さまが自己解決できるための方法をご提供しています。サポートサイトでは、お客さまのビジネスの運用に役立つ対話形式の技術サポートツールに手早く効率的にアクセスできます。サポートサイトでは次のことが可能です。

- 関心のあるドキュメントを検索する
- サポートケースを登録/トラッキングする
- サポート契約を管理する
- HP サポート契約を調べる
- 利用可能なサービスに関する情報を確認する
- 他のソフトウェア利用者とディスカッションする
- ソフトウェアトレーニングの検索および登録を行う

サポートの多くでは、HP Passport へのユーザー登録とログインが必要です。多くの場合、サポート契約も必要です。

アクセスレベルに関する詳細は、次の URL で確認してください。

http://www.hp.com/managementsoftware/access_level

HP Passport ID のご登録は、次の URL で行ってください。

<http://managementsoftware.hp.com/passport-registration.html>

目次

1	概要	7
	Stratacom デバイスから OVPI へのデータの移動	7
	ユーザーの作業	8
	追加情報の入手先	8
2	Preprocessor のインストール	9
	インストールの前提条件	9
	Stratacom Preprocessor のインストール	11
3	データパイプのインストール	13
	円滑なインストールのためのガイドライン	13
	Stratacom Datapipe のインストール	14
	パッケージの内容	15
	入力ファイル名	15
	TEEL ファイルと指令	15
	Datapipe の削除	16
4	設定ファイルの編集	17
	設定ファイルのフォーマット	17
	設定ファイルのサンプル	17

1 概要

Frame Relay Report Pack または ATM Report Pack を使用して Stratacom デバイスを監視する場合は、Stratacom Preprocessor をインストールする必要があります。Stratacom Preprocessor は、Stratacom デバイスからデータを取り出すユーティリティと OVPI データパイプとの間で、変換とフィルタリングを行う仲介者の役割を果たします。このようなユーティリティの 1 つに Cisco Statistics Collection Manager があります。

変換は実行する必要がありますが、フィルタリングは通常、任意で実行します。変換とは、OVPI がインポートして処理できるファイルを生成するものです。フィルタリングの目的は、不要なデータを取り除いて OVPI サーバーの負担を低減することです。

本マニュアルでは、Stratacom Preprocessor のインストールと設定の方法について説明します。また、Stratacom Preprocessor を使用する Stratacom データパイプのインストール方法についても説明します。Stratacom Preprocessor と Stratacom データパイプは別々のパッケージですが、必要に応じて、同時に両方のパッケージをインストールすることができます。

Stratacom デバイスから OVPI へのデータの移動

Frame Relay Report Pack または ATM Report Pack に表示されるパフォーマンスデータは、ベーステーブル内にあります。以下に、パフォーマンスデータが Stratacom デバイスからレポートパックのベーステーブルに移動するまでの流れを示します。

- 1 Stratacom デバイスが統計データを収集します。
- 2 ユーティリティがデバイスから統計データを取り出して、バイナリフォーマットのファイルを作成します。
- 3 Stratacom Preprocessor はユーティリティからバイナリフォーマットのファイルを受け取り、解読します。
- 4 Stratacom Preprocessor が各ファイルを変換し、不必要なデータを取り除いて、`ee_collect` が使用できる ASCII CSV フォーマットのファイルを生成します。
- 5 `ee_collect` が Preprocessor によって作成されたファイルを読み取って、データをデータパイプのフィーダテーブルに追加します。
- 6 `trendmapper` が、データパイプのフィーダテーブルに格納されたデータをレポートのベーステーブルに追加します。

Stratacom Preprocessor が出力したデータは、複数のデータパイプで使用することができます。複数のデータパイプが動作している場合、各データパイプについて上記の手順を繰り返します。

ユーザーの作業

以下のタスクを実行してください。

- **Stratacom Preprocessor** をインストールする。
- インストールが正常に終了したことを確認する。
- プロシージャファイルがスクリプトを正しく呼び出すことを確認する。
- 少なくとも **1 つの Stratacom Datapipe** をインストールする。
- データパイプディレクトリにある設定ファイルを、**Stratacom Preprocessor** ディレクトリにコピーする。
- 必要であれば、設定ファイルを編集する。



通常は、設定ファイルを編集する必要はありません。

追加情報の入手先

本マニュアルに関連するドキュメントには次のものがあります。

- 『Stratacom Preprocessor 3.0 Release Statement』(英語)
- 『Frame Relay Report Pack 4.1 ユーザーガイド』
- 『ATM Report Pack 3.2 ユーザーガイド』
- 『OVPI Report Packs、CD-ROM リリースノート、2007 年 4 月』

OVPI のマニュアルと、OVPI 上で動作するレポート機能についてのマニュアルは、次の Web サイトからダウンロードできます。

http://ovweb.external.hp.com/lpe/doc_serv/

OVPI のユーザーガイドは、[Performance Insight] の下に一覧表示されます。レポートパックおよびデータパイプのユーザーガイドは、[Performance Insight Reporting Solutions] の下に一覧表示されます。各マニュアルの記載項目として、Web に掲載された年月が示されています。マニュアルが改訂されて再度掲載されると、日付が変わります。改訂されたマニュアルはその都度登録されるので、PDF ファイルと Web 版を比較して、新しいバージョンが掲載されている場合はダウンロードしてください。

2 Preprocessor のインストール

本章では、次の項目について説明します。

- インストールの前提条件
- **Stratacom Preprocessor** のインストール
- 正しくインストールされたことを確認するテスト
- パッケージの削除

環境変数は次のように表記します。

{*VARIABLE*}

インストールの前提条件

Stratacom Preprocessor は、特定バージョンの **OVPI** を必要としません。ただし、次のソフトウェアが必要です。

- Perl 5.x

ATM Report Pack と **Frame Relay Report Pack** は、**Stratacom Preprocessor** に必須ではありません。**Stratacom Preprocessor** のインストール時に、これらをインストールすることもできますが、後でインストールすることもできます。

OVPI を分散環境で使用している場合、中央サーバーと各サテライトサーバーにレポートパックをインストールする必要があります。**Stratacom Preprocessor** をインストールする必要があるのは、中央サーバーのみです。ただし、その他のサーバーにもインストールすることは可能です。

パッケージの内容

Stratacom Preprocessor には、以下が含まれています。

- Perl スクリプト
- サンプルの設定ファイル
- **Stratacom Preprocessor** を制御するプロシージャファイル (.pro)

パッケージをインストールすると、Perl スクリプトは **bin** ディレクトリにコピーされます。また Perl スクリプトを呼び出すプロシージャファイルは、**scripts** ディレクトリにコピーされます。

ディレクトリ構造

Stratacom Preprocessor は、いくつかのファイルとディレクトリを認識しないと動作しません。詳細は、次の表を参照してください。

ディレクトリ	機能	デフォルト
Save	入力データのコピーを保持する	{STRATACOM}/save
Config	Stratacom Preprocessor の設定ファイルを格納する	{STRATACOM}/config
Out	Stratacom Preprocessor の出力ディレクトリ	{STRATACOM}/out
In	Stratacom デバイスから取り出された統計ファイルの場所	{STRATACOM}/in
Work	Stratacom Preprocessor からの出力を格納する	{STRATACOM}/work
trend.log	プロセスの開始時刻と終了時刻を記録する	{STRATACOM}/tmp/trend.log

環境変数の設定

これらのディレクトリのデフォルトの場所は、*{STRATACOM}* と呼ばれる環境変数を利用してあります。デフォルトの場所を使用するには、この変数を `trendadm` ユーザーに対して定義しておく必要があります。次の手順を実行します。

- 1 {DPIPE_HOME}/lib/Cshrc に移動します。
- 2 次の行を追加します。 **setenv STRATACOM <ディレクトリ>**
- 3 OVPI Timer を再起動します。

デフォルトを使用しない場合は、`.pro` ファイルを編集して、使用する値を入力する必要があります。

NT での Stratacom 環境変数の作成

環境変数の値を追加または変更するには、次の手順に従います。

- 1 [設定]>[コントロールパネル]をクリックし、次に[システム]をダブルクリックします。
- 2 以下に示すように、[詳細]タブで[環境変数]をクリックし、変更したいユーザー変数またはシステム変数の名前をクリックします。
 - 新しい変数名と値を追加するには、[新規]をクリックします。
 - 現在の変数名と値を変更するには、[編集]をクリックします。
 - 変数名と値を削除するには、[削除]をクリックします。



管理者としてローカルコンピュータにログオンしていない場合、変更できる環境変数はユーザー変数だけです。

- ▶ Windows 2000 では変更内容がレジストリに保存され、次回コンピュータを起動すると、自動的に使用可能になります。新しい設定値を有効にするには、動作しているプログラムを終了して、再起動する必要があります。
- ▶ PC 上でこれらの手順を表示するには、**[スタート]>[ヘルプ]** を選択します。「環境変数」でキーワード検索を行って、「追加」を選択します。

Stratacom Preprocessor のインストール

使用しているシステムの **Packages** ディレクトリに 2005 年 6 月リリースのレポートパック CD からパッケージを抽出していない場合は、ここで CD-ROM ドライブに CD を挿入して、メインメニューからパッケージ抽出プログラムを起動します。

Windows では、メニューが自動的に開きます。UNIX では、CD をマウントし (CD のマウントが必要な場合)、CD の最上位ディレクトリに移動して、次のコマンドを実行します。

./setup

パッケージがシステムの **Packages** ディレクトリに抽出されると、インストールスクリプトは、OVPI を起動してパッケージマネージャを開始するよう、プロンプトを表示します。レポートパックの CD からパッケージを抽出し、パッケージマネージャを実行している場合は、手順 4 から開始してください。

- 1 システムにログインします。UNIX システムの場合は **root** でログインします。
- 2 OVPI Timer を停止し、プロセスが終了するのを待ちます。
Windows NT: **[設定]>[コントロールパネル]>[管理ツール]>[サービス]** の順に選択します。
HP-UX: **sh /sbin/init.d/ovpi_timer stop**
Solaris: **sh /etc/init.d/ovpi_timer stop**
- 3 OVPI を起動してパッケージマネージャを開始します。パッケージマネージャの [ようこそ] ウィンドウが開きます。
- 4 **[次へ]** をクリックします。[OVPI パッケージの場所] ウィンドウが開きます。
- 5 **[インストール]** をクリックします。デフォルトのインストールディレクトリを承認するか、別のディレクトリを選択します。
- 6 **[次へ]** をクリックします。[レポートの配布] ウィンドウが開きます。[レポートの配布] のデフォルトを無効にし、アプリケーションサーバー名とポートのデフォルトを受け入れます。(Frame Relay や ATM などのレポートパックもインストールしている場合は、[レポートの配布] のデフォルトのままにしてください。)
- 7 OVPI アプリケーションサーバーのユーザー名とパスワードを入力します。
- 8 **[次へ]** をクリックします。[OVPI パッケージの場所] ウィンドウが開きます。
- 9 **Stratacom_Preprocessor** の横にあるチェックボックスをクリックします。
- 10 **[次へ]** をクリックします。[タイプの検出] ウィンドウが開きます。パッケージのインストール直後に検出を実行するには、[検出] オプションを選択したままにします。
- 11 **[次へ]** をクリックします。[選択の概要] ウィンドウが開きます。

12 [インストール] をクリックします。[インストールプロセス] ウィンドウが開き、インストールが開始されます。インストールが完了すると、パッケージのインストール完了メッセージが表示されます。

13 [完了] をクリックします。

14 OVPI Timer を再起動します。

Windows NT: [設定] > [コントロールパネル] > [管理ツール] > [サービス] を選択します。

HP-UX: **sh /sbin/init.d/ovpi_timer start**

Solaris: **sh /etc/init.d/ovpi_timer start**

正しくインストールされたことを確認するテスト

Stratacom Preprocessor が正しくインストールされていることを確認するには、DPIPE_HOME ディレクトリでコマンドプロンプトを起動し、次のコマンドを入力します。

```
perl bin/stratacom_preprocessor.pl -h
```

パッケージが正しくインストールされていれば、ヘルプ画面が表示されます。

.Pro ファイルのテスト

プロシージャファイルがスクリプトを正しく呼び出していることをテストするには、以下を実行します。

1 ソースディレクトリにファイルが入っていないことを確認します。

2 DPIPE_HOME ディレクトリのコマンドプロンプトから次のコマンドを入力します。

```
trend_proc -f scripts/StratacomPreprocessor.pro
```

3 Trend ログに移動して、ログのエントリに、スクリプトの開始および停止が示されているかどうかを確認します。

出力ディレクトリ

Stratacom Preprocessor をインストールすると出力ディレクトリが作成されます。Stratacom Preprocessor の出力ディレクトリは、Stratacom データパイプの SourceDirectory としての役割があります。出力ディレクトリへのパスは次のようになります。

```
{DPIPE_HOME}/data/ImportData/Stratacom
```

出力ディレクトリの場所は固定されています。この値は変更しないでください。

3 データパイプのインストール

本章では、次の項目について説明します。

- 円滑なインストールのためのガイドライン
- **Stratacom Datapipe** のインストール
- パッケージの内容
- 入力ファイル名
- **TEEL** ファイルとデフォルトの指令
- **Datapipe** の削除

円滑なインストールのためのガイドライン

レポートパック **CD-ROM** には、レポートパック、データパイプ、およびいくつかの共有パッケージが含まれています。**CD-ROM** ドライブに当該 **CD** を挿入してパッケージ抽出プログラムを起動すると、インストールスクリプトによって、各パッケージが **CD** からシステムの **Packages** ディレクトリに抽出されます。抽出が終わると、インストールスクリプトは、**OVPI** を起動してパッケージマネージャを開始するよう、プロンプトを表示します。パッケージマネージャを使用する前に、次のガイドラインを再確認してください。

ソフトウェアの前提条件

Stratacom Datapipe には次の前提条件があります。

- **OVPI 5.0** 以降
- 実行している **OVPI** のバージョンで利用できるすべてのサービスパック
- **Stratacom Preprocessor 3.0**
- **Frame Relay Report Pack** または **ATM Report Pack**

データパイプはアップグレードできません。古いバージョンの **Stratacom Datapipe** を使用している場合は、まず始めに古いバージョンを削除してください。

分散環境

OVPI システムが分散システムの場合、インストールプロセスはより複雑です。**Stratacom Datapipe** は、ポーリングを実行するあらゆるサーバーにインストールする必要があります。通常は、分散環境の中央サーバーではポーリングは行いません。

Stratacom Datapipe のインストール

レポートパックの CD を挿入し、画面上の指示に従ってレポートパックを抽出します。Windows の場合は、パッケージを抽出するための [メインメニュー] が自動的に表示されます。UNIX では、root としてログインして、CD をマウントし (CD が自動的にマウントされない場合)、CD の最上位ディレクトリに移動して **./setup** コマンドを実行します。

抽出の手順が終わると、インストールスクリプトは、OVPI を起動してパッケージマネージャを開始するよう、プロンプトを表示します。CD からパッケージを抽出し、パッケージマネージャが実行されている場合は、手順 4 から開始してください。パッケージマネージャを実行していない場合は、手順 1 から始めてください。

- 1 システムにログインします。UNIX システムの場合は root でログインします。
- 2 OVPI Timer を停止し、プロセスが終了するのを待ちます。

Windows NT: [設定]>[コントロールパネル]>[管理ツール]>[サービス]を選択します。

UNIX: root で次のいずれかを実行します。

HP-UX: sh /sbin/ovpi_timer stop

Sun: sh /etc/init.d/ovpi_timer stop

- 3 [管理コンソール] からパッケージマネージャを開始します。パッケージマネージャの [よろこ] ウィンドウが開きます。
- 4 [次へ] をクリックします。[OVPI パッケージの場所] ウィンドウが開きます。
- 5 [インストール] をクリックします。デフォルトのインストール先ディレクトリを受け入れるか、必要に応じて別のディレクトリを指定します。
- 6 [次へ] をクリックします。[レポートの配布] ウィンドウが開きます。OVPI アプリケーションサーバーのユーザー名とパスワードを入力します。
- 7 [次へ] をクリックします。[OVPI パッケージの場所] ウィンドウが開きます。次のパッケージのいずれかまたは両方のチェックボックスをクリックします。

Stratacom_ATM_Datapipe

Stratacom_FR_Datapipe

- 8 [次へ] をクリックします。[タイプの検出] ウィンドウが開きます。デフォルト値をクリアします。
- 9 [次へ] をクリックします。[選択の概要] ウィンドウが開きます。
- 10 [インストール] をクリックします。[インストールプロセス] ウィンドウが開き、インストールが開始されます。インストールが完了すると、パッケージのインストール完了メッセージが表示されます。
- 11 [完了] をクリックします。
- 12 OVPI Timer を再起動します。

Windows NT: [設定]>[コントロールパネル]>[管理ツール]>[サービス]を選択します。

UNIX: root で次のいずれかを入力します。

HP-UX: sh /sbin/init.d/ovpi_timer start

Sun: sh /etc/init.d/ovpi_timer start

パッケージの内容

Stratacom Datapipe のパッケージには、以下が含まれています。

- テーブルおよびファイルフォーマットを定義する **TEEL** ファイル
- **ee_collect** と **trendmapper** に対する呼び出しを制御するプロシージャ (**.pro**) ファイル
- 主要なデータをフォーマットする **Rex** ファイル
- データをレポートパックに送り出すローテーションファイル
- **Stratacom Preprocessor** 用の設定ファイル

パッケージがインストールされると、プロシージャファイルは **scripts** ディレクトリに配置され、**rex** ファイルは **bin** ディレクトリに配置されます。

入力ファイル名

Stratacom Preprocessor は、**ee_collect** に適した **ASCII CSV** ファイルを作成します。ファイル名は元のスイッチのファイル名と **Stratacom** オブジェクト識別子を使用します。以下に、**Stratacom ATM** のデータパイプで使用される出力ファイル名の例を示します。

- *filename.0.7* (ATM ポートの割合データを含みます。)

TEEL ファイルと指令

TEEL ファイルは、動作環境を反映するように修正する必要があります。特定の指令はプラットフォーム固有のものですが、その他の指令はカスタマまたはサイト固有のものです。ファイル単独で、その指令がプラットフォーム、カスタマ、またはサイト固有のものがわかります。

SourceDirectory

Stratacom Datapipe の **SourceDirectory** は、**Stratacom Preprocessor** 用のデフォルトの出力ディレクトリです。Stratacom Datapipe のデフォルトの **SourceDirectory** は、次のようになります。

```
{DPIPE_HOME}/data/ImportData/Stratacom
```

出力ディレクトリが正しいことを確認するとともに、環境変数 **{STRATACOM}** が **trendadm** ユーザーに対して正しくセットアップされていることも確認してください。デフォルトディレクトリの詳細については、[第 2 章の「ディレクトリ構造」](#)を参照してください。

SourceDisposition

TEEL ファイルには、次のデフォルト **SourceDisposition** が含まれています。

{STRATACOM}/eecollected

別の配置やファイルの場所を使用したい場合は、**TEEL** ファイルを変更する必要があります。**SourceDisposition** で **{STRATACOM}** 環境変数を使用している場合は、**trendadm** ユーザーに対してその変数が正しくセットアップされていることを確認してください。

Datapipe の削除

Stratacom Datapipe をアンインストールするには、次の手順に従います。

- 1 システムにログインします。UNIX システムの場合は **root** でログインします。
- 2 **OVPI Timer** を停止し、プロセスが終了するのを待ちます。

Windows NT: [設定]>[コントロールパネル]>[管理ツール]>[サービス]を選択します。

UNIX: **root** で次のいずれかを実行します。

HP-UX: `sh /sbin/ovpi_timer stop`

Sun: `sh /etc/init.d/ovpi_timer stop`

- 3 [管理コンソール] からパッケージマネージャを開始します。パッケージマネージャの [よろこ] ウィンドウが開きます。
- 4 画面上の指示に従ってパッケージの削除を行います。アンインストールが完了すると、パッケージの削除完了メッセージが表示されます。
- 5 [完了] をクリックします。
- 6 **OVPI Timer** を再起動します。

Windows NT: [設定]>[コントロールパネル]>[管理ツール]>[サービス]を選択します。

UNIX: **root** で次のいずれかを入力します。

HP-UX: `sh /sbin/init.d/ovpi_timer start`

Sun: `sh /etc/init.d/ovpi_timer start`

4 設定ファイルの編集

Stratacom Preprocessor を設定することで、さまざまな種類の統計情報を出力できます。設定ファイルはデータパイプに付属しており、**Preprocessor** が出力する統計情報の種類を決定します。

データパイプは、付属の設定ファイルを **Stratacom Preprocessor** が使用する **Config** ディレクトリにコピーしない限り、正しく動作しません。このディレクトリの詳細については、10 ページの「[ディレクトリ構造](#)」を参照してください。

カスタマイズしたデータパイプをインストールしている場合は、カスタマイズした設定ファイルが必要です。

設定ファイルのフォーマット

設定ファイルは **ASCII** テキストファイルです。設定ファイルの名前は、該当する **Stratacom** クラスによって決まります。たとえば、フレームリレーのインタフェースの統計情報は、**stratacom.3** と呼ばれるファイルに定義されています。

設定ファイルのどの行にもコメントを入れることができます。コメントの始まりは、シャープ記号 (#) によって表されます。統計情報が必要であることを示すには、**Stratacom** の識別番号を行に入力します。各行に 1 つの統計番号のみを入力してください。

CLASSNAME=<名前> がサポートされています。この指令が設定ファイルで検出されると、クラス番号の代わりに <名前> を使用して出力ファイルが識別されます。

利用可能な統計情報およびその番号付けについては、**Cisco** が提供する **Stratacom** のマニュアルを参照してください。

設定ファイルのサンプル

```
#####  
#  
# Version @(#) stratacom.0.2 /main/1 tegggers Thu Apr 23 22:47:53 2003 @(#)  
# Solutions Engineering Group  
# Copyright 2003, Hewlett-Packard Company  
# Package:Stratacom FrameRelay  
#  
#####  
  
# This file is used to configure which Stratacom statistics the preprocessor should output.  
# The order of the statistics below is preserved in the output file.  
# The name of this file should indicate which particular object type we are configuring.  
# Filename is objectnum.subobjectnum, eg 0.2 is for frame relay connections.
```

Each stat number mentioned causes two columns to be output, one for total and one for peak.
If peaks are not enabled then nulls are produced.
If a stat mentioned below is not found in the file nulls are output.
#

```
#-----  
#number# Stracom name                # maps to column  
#      #                               #  
16     # seconds in service           # AvailableSeconds  
21     # DE frames received           # InAmberFrames  
24     # DE bytes received            # InAmberOctets  
1      # Rx Frames discarded          # InDiscards  
30     # IWF frames Rx with EFCI set  # InFECNFrames  
0      # Frames Rx                   # InFrames  
9      # Bytes RX                    # InOctets  
22     # DE Frames                   # OutAmberFrames  
28     # Bytes TX in xs CIR          # OutAmberOctets  
18     # Frames Tx with BECN         # OutBECNFrames  
17     # Frames Tx with FECN        # OutFECNFrames  
2      # Frames Tx                   # OutFrames  
11     # Bytes Tx                   # OutOctets
```